

高校時代、日本に興味を持ったオラは17歳でアメリカから交換留学生として来日し、奈良県五條市で1年間暮らししました。大学卒業後は、文部省（当時）の制度で山形県初の英語教師となって山形弁をマスターし、今では日本で暮らして30年以上。テレビのロケや講演で、これまで合併前を含めて延べ2700以上の市町村を訪れています。

田園の景観、お寺や神社、春のお花見、夏のお祭りや花火、秋の紅葉、冬の温泉と、四季が楽しめます。そして、日本酒……日本で好きなものは、数えきれねえほどいっぱいあります。特に農業の風景は印象深く、小さな棚田や段々畑での丁寧な仕事ぶりや、農家のお母さんのもんぺやかっぱう着などのファッションまでもが、他の国にはない大きな魅力だと感じています。しかも、日本の田舎は、「古きよき」を大切にしつつも、「新しきよき」をも取り入れて、ダイナミックに変化しています。

山形にいた時は、210の中学高校を一人で担当していたから、毎日のように県内をあちこち出張してました。どこもすごくいいところなのに地元の人たちは「なんも

自信を持って、田舎の魅力を発信しよう！

山形弁研究家 ダニエル・カール

ねんだ（何もないんだ）」と言う。それじゃあ、外から来た人には分からない。そういう田舎は今も多いけど、謙遜ばかりでなく、地元の良さを少しでも自慢し、宣伝すべきだと思います。

とはいえ、一つ一つの市町村では発信力が弱い。「まとまって宣伝しないと」とオラは前からよく言っていました。宣伝下手でも市町村同士が力を合わせて手を組めば、田舎の良さを分かりやすく外の人に伝えられるはず。交換留学の仲間は半分が田舎、半分が都会に滞在しました。今も連絡を取り合ってますが、都会組はほとんど日本に戻らないのに、田舎組はオラのように日本に暮らす者もいれば、また日本に来ている人が多いです。海外から来る旅行者も、最初は東京や京都などの都会に行くけど、「次は田舎に行きたい」という声をよく聞きます。

自分たちで田舎を宣伝する時は、「多少不便かもしれないけど」と正直に言えばいい。「なんもねんだ」ということだって、立派なセールスポイントになると思います。（談）